

<b>Title</b>	震災における教派・教会をこえた出会い(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：分科会報告 E)
<b>Author(s)</b>	吉田, 久仁子
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 143-146
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4926">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4926</a>
<b>Rights</b>	


 The logo for SERVE consists of the letters S, E, R, and E in a serif font. The letter 'V' is replaced by a stylized checkmark symbol that is positioned over a square box.

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 震災における教派・教会をこえた出会い

吉田 久仁子

掲げられているテーマについて、全体像を取り上げることが難しいと考えた。そこで分科会の具体的な進め方としては、二〇一一年三月一日以降、様々に困難な状況に置かれた福島県いわき市にあつて、教会と幼稚園の場でどのような「震災における教派・教会をこえた出会い」が与えられたのか、報告を聞き、引き続き来場の方々との質疑応答や意見交換を通して、テーマについての理解を深めた。

### 1. 教派をこえた出会い

「あなたは、子どもたちを守ったけれど、あなたを支えたのは誰？」

東日本大震災から一年一〇カ月経った一月下旬に海外メディアの取材を受けた。三・一一地震発生時の幼稚園の状況、その後の子どもたちの避難、幼稚園再開に向けての対応、一カ月遅れの卒園式、入園式、保護者対応、除染……い

かにして放射線から子どもたちを守るかがすべてであったことを話していると、あの日々が鮮明に蘇ってきた。そして、最後にこの予想外の質問が投げかけられた。一瞬言葉が詰まり、そして、涙が溢れ出てきた。

「子どもたちです。」

こう答えるのが精いっぱいであった。私にとつてこの問いは三・一一以降ずっと葛藤していたことであった。三・一一直後から、福島県いわき市は東京電力福島第一原子力発電所から近いということで、放射線への恐怖が電気以外のライフラインを途絶えさせた。ゴーストタウン化しているとメディアが伝え、おにぎりやパンの配給が始まった。不安のただ中に置かれていた。普通に考えれば誰もが放射線リスクのある「いわき」に思いはあつても足が向かなくて当然である時に、数台のトラックを連ねて食料品や衣類、その他生活必需品の支援物資を届けてくれたのは日本ホーリネス教団坂戸キリスト教会員を中心にした方々であった。まさに、生きることに望み繋ぐ物資である。この支援物資は避難することのできないお年寄りが生活する老人保健施設や病院、いわきに留まった磐城教会員、清風幼稚園児宅にお届けした。後にこの支えは清風幼稚園保護者のお一人から「キリスト教の幼稚園で良かった」という有難い言葉をいただくことになった。十数回に及ぶ支援は形を変えて今年度も継続されている。

しかし、保護者や関係者から感謝の言葉をいただくたびに私の心は虚しさを深めていった。勿論、日本ホーリネス教団の支援には心から感謝していたが、日本基督教団はいつアクションを起こしてくれるのだろうか？ 目に見える支えを熱望していたというのが正直なところであった。

葛藤や虚しさは未だすべて払拭されてはいないが、負の遺産だけではなく大きな困難の中にも教派をこえた人と人との豊かな繋がりが得られた。小さな一人ひとりの力が一年二年と継続することにより中身が濃くなり、人と人との繋がりも深まり、倍の恵みが注がれていることを感じていることも事実であり、しっかりと認識しなければならないことだと

思っている。まだまだ多くの迷いはあるが、イエス・キリストに繋がる共同体の一員として、この出会いを大切に、兄弟姉妹と共に交わりを持ち、神さまに喜んでいただける生きた働きができる者でありたいと願う。

## 2. 私に与えられた使命

「私が何故、発題者に立てられたのか」

今ここに立てられる意味について深く思いを巡らした。そして、私に与えられた使命は、ただ私らしく幼稚園の園長として東日本大震災以降の教派・教会をこえた支え、出会い、人と人との繋がりについての事例をシンプルにお伝えすることだということに気づかされた。

日本ホーリネス教団の皆さまからのご支援の中に手作りの惣菜があった。輸送のために冷凍された、おからやお浸しである。この惣菜を清風幼稚園の調理室で大鍋に移し温め、パック詰めをして日本ホーリネス教団の皆さまと共に近隣の避難所に提供した。これらの惣菜を持ち込むと人だかりができた。「お弁当や菓子パンしか食べてないから、お浸しは嬉しい」。年配のご婦人の言葉が忘れられない。不安と疲労の中に過ごしていた人々にとつて心のこもった手作りの惣菜は束の間の癒しとなったことと思う。

三・一一当初はこのような食料をはじめ生活必需品をご支援いただいたが、時の経過とともに支援の内容は変化した。今年の夏休みには清風幼稚園にて坂戸キリスト教会CS（教会学校）による「バイバイバイフェスティバル」が開催された。

CSの先生が「これからはどんな支援が必要ですか？」と尋ねてくださった。被災地の私たちをいつも覚えていて

く下さることがとても心強く、心から感謝する。そして、これからは心の繋がりが何より有難い。特に子どもたちの将来に目を向けていただきたい。今後、東京電力福島第一原子力発電所は三〇〜四〇年かけて廃炉へと向かう。福島に住む人々だけではなく、日本中、そして世界の人々も負の遺産を背負って生きなければならぬであろう。その中心を今の子どもたちが担わなければならない時が来る。どうかその時に『共に生きる』ことのできる子どもたちを育てていただきたい」とお願いした。

福島の人たちは放射線と向き合う生活の中で、それぞれが誰とも共有することが難しい心の闇を抱えて生きているので、そういう生き方もあることを知っていたきたい。また、清風幼稚園の子どもたちにも目には見えない神さまがいとも傍にいてくださること、多くの人々の思いによつて支えられていることを感じることで豊かな感性が育つことを願っている。

東日本大震災を通して出会い支えられ繋がることのできた人々と共に、子どもの成長に真剣に向き合い、歩みを続けていきたいと思う。